

## ゲイ・カミングアウトの社会学をめざして

— 自分の事例をてがかりに —

小高良友

### [1] はじめに

この論文のテーマは、私がゲイとしてカミングアウトしてきた歴史と体験をふりかえり、それについて総括してみることである。

私は同性愛の研究がしくて大学の教員の道を選んだ。それも、私自身が当事者である研究を私はしたかった。しかし、そう決めてから今までの道のりは長かった。学問の師のアドバイスに従い、表だって同性愛の研究をすることはできなかったが、それでももう50歳になってしまった。すでに若手を中心としたゲイスタディーズの社会学研究者も輩出され、ゲイ・カミングアウト作品も何冊も出版されている。今更の観がないわけではないが、私にもようやく書ける環境ができてきた。定年まであと15年。大学院に入学してからの年月の過ぎゆく早さを考えれば、あと15年などあつという間である。これから少しずつ書きためずしては後悔してしまいそうだ。

本論文の構成は大きくは二つに分かれる。前半部は私のゲイ・カミングアウト体験記であり、後半部はそれについての総括である。

私が大学時代にゲイとしてカミングアウトしたころは、ゲイのカミングアウト自体が珍しく、ゲイが実名でカミングアウトした本格的作品はまだ出版されていなかった。この領域において実名で本格的な先陣を切ったのは伏見憲明<sup>1</sup>である。彼の勇気ある出版におそらく励まされ、それ以降、実名でのカミングアウト作品の出版が続き<sup>2</sup>、ゲイのカミングアウト作品は珍しくはなくなった。その意味で私のそれは先駆的価値はないが、今までの作品と違うところは、今までの著者たちはみな独身者であるということであろう<sup>3</sup>。私は既婚者である。その意味では、私が結婚も含めて実名でカミングアウ

トについて記しても、新しい一つの意味はあるう。

私が本稿で行うゲイ・カミングアウトの総括は、基本的には自分を事例としての総括にすぎない。私が記憶している限りで既出のカミングアウト作品で言われていることもおおまかに目配りしてはいるつもりであるが、勇気ある先人達のそれらの発言との異同も厳密に考慮した一般化を私が試みているわけではない。

さて、本稿で使用する主要なことばを簡単に定義しておこう。それらの定義自体、いくつかの議論があることは承知しているつもりであるが、本稿は定義論には深入りしない。本稿で使用している「ゲイ」は、男性同性愛者と女性同性愛者の双方を含めて使用されている。本稿でいう「同性愛者」とは、程度の差はあれともかくも同性に性的欲望を感じる人、と定義しておこう。また、「ゲイのカミングアウト」、「ゲイであることのカミングアウト」、「ゲイ・カミングアウト」とは、自分が同性愛者であるということをも自分以外の誰か1人以上に告白することをさしている。一般的には「カミングアウト」とは「ゲイであること」を告白することとは限らないが、本稿の以下では、「カミングアウト」だけで「ゲイであることのカミングアウト」の意味で使用されている。

### [2] カミングアウト前夜 — 大学入学までの自分 —

私がカミングアウトしてからよく聞かれる質問は、「いつからゲイだと自覚したの?」というものだ。まずその質問に答える形で本節を進めてみよう。

自分が他の男の子たちとどうも性的に違っているらしいと漠然と自覚するようになったの

は、高校に入学して間もなくの頃であろう。中学の中頃から自分の性的興味は明らかに同性に向かい出していたが、私は異性にも恋をしていたため、そのことは別段不思議には思えなかった。自分の夢精がいつ頃から始まったのかは記憶が定かではないが、何度もオナニーするようになったのは高校からである。高校ではオナペットに同性を進んで選ぶようになり、また、同級生の恋愛談義を何度も聞くようになって、自分はどうもみんなと違うと思い始めた。

しかし、私は進学校に入学しており、大学に入学するまではとにかく学校の勉強に専念しようとして決めていたため、性的に自分がみんなとどのように違うのかを本格的に考えることは意識的に後回しにした。

### 【3】 大学時代でのカミングアウト

念願の第一志望の大学に現役合格でき、そこから自分の性を探求する私の旅が始まった。男性向け成人雑誌や若者向け雑誌の性の相談コーナーなどに目を通すうち、自分は世の中では「同性愛者」と言われるグループに入れられているということに気づくようになった。初めはそれが信じられず、そうではないと何度も否定したが、いろいろな本を調べるうち、どうもこれは否定しがたい事実であることがわかってきた。それからである。大学の講義に出ているときも、いつも頭のなかには「自分はみんなと違う」「自分は異常だ。変態だ」という思いが頭をめぐり、今にも気が狂いそうであった。

そのころ、私が入学した東京都立大学では、大学紛争の申し子として「総合コース」という目玉商品が誕生し、私の入学年度のテーマには「性」が選ばれていた。今でこそ珍しくなくなったが、そのころ1年次からいわゆるゼミがあることは珍しく、しかも、その総合コースとは、複数の学問から「性」について探求しようという全学的教養ゼミであった。そのゼミを履修しても卒業単位にはならなかったが、担当教員の多さと自由な雰囲気から惹かれて、私はそのゼミにとびつくように参加した。

「性のタブー」について研究しますと初めは

宣言してひとりで資料集めなどを始めたが、夏休みごろ、自分にはもっとやりたいテーマがあるのではないかと心の声がさかんに私をけしかけた。ところが、同性愛のテーマを選ぼうと何度も決意はするものの、「やはりだめだ」、「そんなことをしたら人生の破滅だ」などと思いつき、決意してはやめ、やめては決意し直すということをして私は繰り返す。結局学年末の自分の研究発表までは、ゼミでは自分のテーマを明かさず内密に研究を進めた。

手始めは、成人雑誌の広告欄に掲載されていたゲイ雑誌広告を頼りに、新宿2丁目にあった当時の『アドニスボーイ』の出版社を訪ねた。編集長は南定四郎さんであり、やっと探しあてたその出版社とはアパートの一室であった。

南さんにお会いするという事は、私にとって初めての「同志」とのご対面であり、相手は1人の「同志」とはいえ、生まれて初めてのカミングアウトであった。自分のことはさておき、まるで宇宙人を見るかのように私は南さんを見つめた。不安そうに部屋に入る私をみて、南さんは気遣いながら来訪の意図を尋ねた。私がびくびくしていることを見透かし、「襲ったりしないよ」、「僕らにも選ぶ権利があるし、マナーは男女間と同じだよ」と南さんが言ってくださった。

南さんはその後、私を1軒のゲイバーに案内した。同性愛の世界を研究したいからゲイバーでアルバイトしてみたいという私に、商売となるとそんなに甘いものではない、体をこわすのがおちだからやめておいたほうがよい、との厳しいアドバイスが飛んできた。この夜が新宿2丁目での私のデビューとなった。

終電車がなくなり、その夜は南さんのご友人のアパートに泊めていただくことになったが、私は一睡もせずとその方の布団の横に正座をしたまま朝を迎えた。

その後の私はひとりで新宿2丁目に行けるようになり、南さんに連れて行っていただいたゲイバーに何度か通い、そこのバーテンをしていた「黒ちゃん」にインタビューを行った。

迎えた翌年1月、八王子セミナーハウスで総合コースの研究発表会があった。発表会には、

総合コース担当の教官のうちのお二人(野口武徳・北川修)が同席していた。私は同性愛についての自分の研究発表を初めて行うことになった。

私がテーマを話し出すと、「どうしてそのテーマをやるのか」という質問がすぐに出てきた。予想したことではあったが、私は緊張しまくり、それこそ「清水の舞台」から飛び降りる勢いで「自分は当事者としてこの研究を行いたかった」と話し始めた。そのとたん、場内は一瞬静まり返り、しばらく誰も何も発言しなかった。しばらくして、ざわつき出し、みんなは事の次第を了解し始めた。それからいっきにまくしたてるように私は自分の報告を終えた。

報告会の終了後、みんなは私のカミングアウトの勇気を称賛してくれた。

その後、4月初めに総合コースの報告書が学内に公開されるため、実名で自分の報告をするかどうかの決断をせまられ、私は迷った。匿名にすべきだと仲間たちはアドバイスしてくれたが、私は実名で発表することにした。

そして4月。総合コース報告書<sup>4</sup>が自分のクラスや学内に配布される日がやって来た。友人たちはどのような反応をするのかが怖かったが、そのなかからひとり、自分も仲間だとカミングアウトしてくれた友が出てきた。友人たちは誰も私のもとを去らず、それどころか、今まで以上に私を信頼してくれるようになった。

都立大学での初めの1年間は私にとって記念すべき忘れられない1年間となった。細々ではあったが、その1年間で自分なりに同性愛の研究をしてみてもわかったことは、同性愛について世間で言われていることのほとんどが修正の余地があるものであり、今までの自分は間違った風評におびえて余計な心労をしてきたということだ。

3年次の終わりの私は自分の進路に一応のメドをたてなければならなくなった。当時の都立大学は、いわゆる大学紛争が終結した直後で、まだその火の粉が残り、全く相容れない主張を持つ複数の学生運動グループが学内で活発な論争を繰り返していた。高校までは多様な価値観などにはあまり縁がなかったが、大学はまるで

違っていた。何を信じてよいのかわからない、自分の価値観を鍛え直したい、社会の本質を見抜けるような力をつけたい、何度もこのように自問した。結局は、同性愛についての研究を突破口にして社会の本質を考えていくような仕事につきたいと漠然と私は思うようになった。私の場合、そのために大学の教員になろうと考えたわけだが、どの学問を当面選択したらよいかの決断がつかず、1年間の留年を決め、正規の4年次は法学以外の学問を広く学ぶ年になった。

その4年次の大学祭において、同性愛をテーマに研究発表を1人で行った。学外からもゲイのグループが見学に来てくれるなどして、私のカミングアウトの対象は大学全体と一部学外に広がったが、自分に不都合なことは何ひとつ起こらなかった。

#### 【4】大学院でのカミングアウト

同性愛を研究テーマに選択した私は、社会学を学問的窓口として研究を行うことを決意し、大学院を受験することになったが、もともと法学部出身の私は、社会学の勉強を4年次から始めたためもあり、結局のところ大学院浪人を3年間するはめになってしまった。

筑波大学大学院の入試の面接では、自分が同性愛者であること、自分は同性愛の研究をしていきたいことを隠さずに述べた。

筑波大学大学院に無事入学することができたが、入学後、後の指導教官となる副田義也先生から私は次のようなご注意を受けた。

他の学問に比べると社会学はリベラルなほうだが、それでも性の研究でさえまだまだ偏見があるのに、ましてや当事者として同性愛の研究をするとなるといろいろなハンディが予想される。おそらく大学教員としての就職先がないだろう。当面は、同性愛の研究を進めるのはかまわないとしても、もっとテーマを広げた形で、「普通の」テーマを選んで研究を進め、大学の教員としてポストを得てから同性愛の研究を堂々とやるように。

そこで私は、同性愛が研究分野に含まれる社

会病理、逸脱行動の分野を自分の研究分野と決め、社会病理の一般理論を修士論文・博士論文のテーマとすることになる。

大学院の仲間たちは、私のカミングアウトに驚きはしたものの、同じ研究者仲間として私のよきライバル兼アドバイザーとなってくれた。

## 【5】東海女子大学でのカミングアウト

筑波大学大学院での院生生活8年と助手生活2年を経たのち、現在の職場である東海女子大学に専任講師の職をえて、私は平成1年4月に赴任した。

永続的なポストを得たら同性愛の研究を思いっきりしてよい、というアドバイスをしてくれた師から、赴任にあたって再度アドバイスをいただいた。

東海女子大学はどのような大学かわからぬゆえ、また女子学生は一般にうわさ好きかもしれないため、同性愛の研究は表だってしないこと、また講義でカミングアウトしないこと、というご注意がそれだ。東海女子大学の無くてはならない人材になったらカミングアウトしてもかまわない、と恩師から私は再びきつく言い渡されたわけだ。

そこで私は、まず博士号取得に乗りだし、平成7年にそれを実現したあと、当時の東海女子大学で私が所属していた人間関係学科社会学専攻の生き残りのために、自分も初級システムアドミニストレータや第二種情報処理技術者の国家資格を取得して情報処理関連の資格取得のための学生教育に心血を注ぎ、少し後にはそれと平行して、社会福祉士国家試験の受験対策講座を自主勉強会の形で開始した。私自らも社会福祉士の受験資格を得るために夜間の専門学校に学生として1年間通い、平成8年の国家試験で社会福祉士の資格も取得した。

社会福祉士国家試験の受験対策勉強会が軌道にのって間もなく、私は勇気を出して自分の社会病理学の授業でカミングアウトした。

学生達は初めはびっくりしていたが、毎年、私のカミングアウトを歓迎してくれ、いつそう私を信頼してくれるようになった。私がカミン

グアウトしたことで東海女子大学が私を首にするようなら自分も大学を辞めます、と言ってくれた勇ましい学生もいたくらいだ。

そして、平成15年には、東海女子大学の紀要に自分の初めてのカミングアウト論文<sup>5</sup>を発表する勇気ができた。このころ、私の勤務校は生き残りのぎりぎりの時期を迎え、全国トップクラスの合格実績を出し続ける福祉士国家試験受験対策勉強会は本学の欠かせない切り札となっていた。今なら教職員の間でゲイであることをカミングアウトしても首を切られる恐れはないと私は判断し、公表に踏み切ったが、さすがに勇気がいった。その紀要が配布された当初は、学長に呼ばれると、紀要の件ではないかとおびえたものだ。

本学の紀要に掲載された私の上記の論文をどのくらいの先生方が実際に読んでくださったのかは全くわからない。先生方の暗黙の反応から読んでくださった先生がおられることはわかったが、お一人を除いては、そのことに誰も何も触れなかった。そのお一人は本学に隣接する短期大学の先生であったが、私の論文を絶賛してくださり、とてもうれしく思ったことを今でも私は忘れない。

## 【6】妻へのカミングアウト

妻へのカミングアウトについては、カミングアウトに焦点を当てた形でないとはいえ、既出の私の論文<sup>6</sup>で書いているため、本稿では、そこでの話と重複する部分は要約程度にとどめておこう。

私は妻には結婚前にカミングアウトを済ませていた。妻はそのことを承知で私の結婚を望んだ。それでも妻が初めは譲らなかったのが子作りという1点であった。そのことも後にはさらに妻が譲歩し、結局私たちは結婚することになった。

心配された子作りのほうは、なんとか突破できた。

妻は、私が同性愛者であるということはあまり気にしていなかった。むしろ、私と知り合ったときから妻は漠然とそのことに気づいていた

そうだ。妻はそれよりも私の人間性のほうが大事だと思っていたようだ。

妻のことは大学院に入学して間もなく宗教団体の会合で知った。私は彼女の顔をはっきりわかっていたが、彼女は私の存在自体にその時は気づいていなかった。その後まもなく彼女の先輩が大学院を受験することになったことから、人づてに私を紹介され、その後輩に提供する情報を得るために彼女は私に連絡をしてきた。それからしばらくして、彼女の上司を通じて彼女から交際を申し込まれた。当時の私は大学院修行時代であり、仮にそうではなくても結婚は私には全く考えられないことであった。その電話のあとで、すぐに彼女にカミングアウトの手紙を書いた。私のその手紙にたいする彼女の返信が13年後の私を結婚へと決定づけることになったわけだが、その手紙の内容は、ゲイであるという私のカミングアウトにたいして、私と交際を考えていたひとりの女性がどのような反応を示したかのひとつの貴重な事例になる。貴重と言ったのは、私が知る限りで、ゲイの既婚者で結婚前に自分の妻に自分がゲイであることをカミングアウトしている事例が極めて希であるからだ。

以下は彼女からのその手紙である。この公表にあたっては彼女の承諾は得られていない。このことが妻に知れたらただでは済まないことは目に見えているが、この手紙は私の宝物であるとともに、カミングアウトしていない既婚のゲイたちへの、また異性と結婚を考えている未婚のゲイたちへの貴重な参考資料になるという大義名分のもとに、妻には私の人生をかけて許してもらおうつもりだ。

盛夏の候、いかがお過ごしでしょうか。お手紙をいただき、早一ヶ月が過ぎてしまいました。すぐにお返事を書きたかったのですが、都議選等の諸事情にかまけて今日になってしまいました。返事というよりも、自己自身の思うにまかせての一言になってしまうと想いますが、お許し下さい。

小高さんが同性愛者であるということ…特別な驚きはありませんでした。お電話の声を

聞いた時に、何か直感するものがありました。きっとあなたに対する行為が異性を意識してのそれではなかったのかもしれない。

人が人を好きになるということは、「性」をぬきにしては到底考えられないことです。それを上回って余りあるものが「性」の区別を超えたところの「人間」そのものにひかれるということなのでしょう。同性愛ということについては、あまりよくわかりませんが、私は当然ありえることだと思っております。ですが、現実的には、「性」が行動をとるようになってくると、複雑な問題になってくるとは思いますが…。これからの社会学の分野では、当然あらわれてくるであろう、また、だれかが取り組まなければならない研究課題であると思われまます。ただ、今の日本においては、まだまだまさしく命をかける課題なのでしょう。あなたはお手紙の中で、このことをひとつの突破口として社会の本質を見抜いていきたいとおっしゃっておりましたね。あなたの生き様を見る思いがします…。

「探求する心」「求道」、私の最大価値のひとつです。現時点での日本では、まだ公にすることのできない課題に多くの客観的犠牲を払いながらも、しかも情熱をもって取り組もうとするその生命の宿命ともいえるべき強靱さ…。宿命と使命の一体化を思うとき、哀しくもあり喜びもあり、涙がでてしかたありませんでした。これからも声援を送らせていただきます。

私はひよっとするとあなたほど女性に関心をもっている人はいないのではないかと思っています。無意識層で執拗に意識しすぎたあまり、反対に受け入れることのない無縁のものになってしまったような気がしてなりません。

それでは、暑さ厳しき折、お身体を大切に。

私の社会病理学の授業で「同性愛の社会学」のテーマで講義を行うさい、2年度続けて同じ質問をして学生に回答を書いてももらったことがある。その質問とは、あくまでも仮定の話であるが、「自分がつき合っている男性もしくはは將

来の夫が同性愛者であるとわかったとき、あなたはどうしますか」というものだ。「同性愛者であることがわかった」という設定が、本人自身のカミングアウトによるものか、もしくは本人以外からの情報によって知ってしまったかの区別はつけられていない。学生たちの回答をおおまかに紹介しておこう。「すぐに別れます」「すぐに離婚します」という回答は1割程度である。そのような回答がほとんど前提にしているのは、「彼(夫)は女性を愛せないのであるから」という想定だ。後述するように、ゲイと一言でいっても、ゲイが同性に性的欲求を感じる度合いは様々だ。その分、ゲイが異性に性的欲求を感じる度合いも様々ということになる。かなりの異性愛者たちには、すべてのゲイは異性に性的欲求を全く感じないと思っているふしが大いにある。この判断は私の講義を受けた学生たちのレポートを主たる根拠にしている。これは、私の知っているゲイたちの限りでいえば、全く正しくはない。異性に全く性的欲求を感じないゲイもいれば、同性に性的欲求を感じる割合と異性に性的欲求を感じる割合が半々のゲイもいる。そのことを学生たちに説明すると、「すぐに別れます」「すぐに離婚します」と回答した学生たちも含め、大半の学生たちは驚きを隠さない。

そのような説明をしなくても、半分以上の学生たちは、程度の差はあるものの、「とりあえず相手と話し合います」「彼(夫)が私のことを愛してくれているのであれば、別れないでいようと思います」といった趣旨の回答をしてくる。つまり、自分に愛情があるのであれば、ゲイであるとカミングアウトされてもすぐに別れようとはしない、というのが半数以上の学生たちの回答である。もちろんこれは仮定に基づく回答である。何人かの学生は、実際にその場になったらどうなるかわかりませんが、という留保をつけて上記のような回答を書いてくる。

## 【7】 兄へのカミングアウト

東京都立大学に入学して5年次、それは自主留年1年目でもあるが、社会学を学問的窓口と

して大学院に入学し同性愛の研究を始めようと決意した私は、とりあえず兄弟たちにはそのことの一応の了解をとりつけておきたいと考えた。私には10歳年上の長兄と8歳年上の姉、6歳年上の次兄がいる。自分も当事者であるとカミングアウトして同性愛の研究をしていく以上、私は兄弟にはその旨の了解を得て堂々と研究していきたくったのだ。

手始めに長兄にその旨を話してみた。当初長兄は私の告白も別に気にしないふうであったが、その1週間後、次兄の来室で事の次第を私は知ることになった。次兄が鬼のような形相で私の部屋に現れ、週末に長兄の家に行くぞと一方的に私に告げた。理由を尋ねると、次兄は「わかってるだろー」との一言。長兄は自分の妻に私のカミングアウトの話をし、そのことにびっくりした義姉が長兄を促し、兄弟会議が開かれることになったようだ。

長兄の家で夕食を囲んで、長兄、次兄、私の3人だけで話し合いが持たれた。義姉は食事の支度を終えると席をはずした。長兄は、私が同性愛の研究を始めたら自分の商売や自分の娘の結婚にもさしつかえると猛反対し、私が同性愛の研究を続けるのであれば兄弟の縁を切ってからやってほしいと言い切った。

私は、兄たちには迷惑をかけない形で研究していくことを考えている旨を話し、それでも兄弟の縁を切りたいというのであればかまわない、と切り返した。結局二人の兄は私の気持ちが半端ではないことを知り、とりあえずは黙認という形でその日の兄弟会議は終了した。後日談であるが、そもそも兄たちは法学部出身の私が社会学の大学院になど合格できないと思っていたようだ。なお、兄たちは、私たちの両親が昔の人間ゆえ、また姉は既に嫁に行っている故、両親と姉には私がカミングアウトしないほうがよからうと勧めてくれた。

その3年後、大学院の入学報告に行った私に長兄は、「やっぱりやるのか」と心配そうに尋ねたが、小遣いをもたせて筑波に送り出してくれた。

それから12年後、私が結婚の報告をすると、長兄も次兄も私が「改心」をしたと誤解したら

しく、とても喜んでくれた。もちろん私は「性的」に何ひとつ変わっていなかったのだが。

## 【8】宗教の同志へのカミングアウト

私は筑波大学大学院に入学する直前の昭和55年に創価学会に入会した。創価学会が信仰しているのは、日蓮大聖人が宗祖となっている仏教であり、それは釈迦が宗祖となっている仏教の一つの宗派である。世界に流布している宗教のなかには同性愛に対して厳しい立場をとる宗教もあるが、創価学会の信仰には同性愛について特段の定めはない。

筑波大学に学ぶ学生たちのうち創価学会に入会している学生たちで学生部という組織が作られているが、その一員であった10年間、私はゲイであることをもちろんカミングアウトしていたが、学生部の同志たちはそのことで私を差別するようなことはもちろんなく、むしろ、私にいつその親愛の情を示してくれた。彼らにとって私を評価するうえで大事なものは、私の性的指向ではなく、私の人間性であり、私の信仰姿勢であった。

私が岐阜にやってきて地元の信仰組織に所属してからも、それは変わらない。岐阜にきて私が当初心配したのは、家庭を持っている創価学会のご婦人たちが私のカミングアウトにどのような反応をされるかということであった。

ご婦人の同志も含め岐阜での創価学会の同志たちには、20人～50人規模の会合で信仰体験談などを通して私はカミングアウトしてきた。どうもみなさんは、私が結婚しており子供もいることから、私がゲイであるということを信じていない様子もみられるとはいえ、別段私への評価がそのことでマイナスに変わることはなかった。

## 【9】カミングアウト総括

前節までは、18歳から50歳までの32年間における私のカミングアウト体験である。それは、ゲイであることを自分がカミングアウトしたときにカミングアウトされた相手がどのよう

な反応を私にするのかを知るための探検でもあった。これは、初めは他の1人のゲイにたいしてカミングアウトすることから始まり、そのたびにカミングアウトされた人の反応をみながらその対象を私が少しずつ広げてきた歴史でもあった。私のこの32年間を総括してみよう。

### (1) 私にカミングアウトされた人の反応

第一。私がカミングアウトした相手が友人・知人の場合に限っていうと、私のカミングアウトは、私にマイナスの結果をもたらすものではなかった。私のカミングアウトは相手に驚かされるが、それは告白された相手にとっては一般的には所詮他人事である。私がゲイであることは、カミングアウトされた相手にとっては自分に「被害」が及ばない限り重大なことではない。このことは、カミングアウトされた人にとっては、今更私が仰々しくこのように書かなくとも、当たり前のことなのであろう。しかし、カミングアウトする私には、それは自明なことではなかった。

第二。そうはいっても、私にカミングアウトされた同性の友人・知人は、私と同室で泊まるときなどは私がゲイであることをひどく気にする。彼らは私に襲われるかもしれないと思う。私と同室で泊まるという状況は、自分に「被害」が及ぶかもしれない状況だからだ。もっとも、そのときの友人・知人のその気持ちは32年前に南定四郎さんを初めて訪ねたときの私の気持ちを思い出せば私にもはっきりわかる。私とて自分がゲイでなく相手がゲイであったらおそらく同じ反応をするだろう。しかし、男女間の恋愛であれば互いに選ぶ権利があるように、ゲイがする恋愛であろうと相手を選ぶ権利があるのだ。その人に私が恋愛感情を持っていない限り、その同性はただの同性にすぎず、襲いたい相手などにはならない。また、仮に私が恋愛感情をもつ相手だったとしても、相手も自分に恋愛感情を持っていると私が確信できない限り、そうそう相手に手を出せるものではない。そんなことをしたら普通の男女間の場合以上に人間関係が壊れてしまうからだ。男女間に恋愛のマナーがあるように、同性間の恋愛にももちろんマナーがあるのだ。

第三。私にカミングアウトされる相手が私の兄弟になると、事情は違ってくる。それは私が長兄と次兄にカミングアウトしたときの状況として前述した通りだ。私がゲイであるということは、私の兄弟にとっては「ひとごと」ではなく自分たちに「危害」が及ぶことかもしれないからだ。

第四。私が出会ったゲイの既婚者のほとんどは妻にカミングアウトしていなかった。そんなことをしたらどうなるかわからないとみんな口をそろえて言っていた。しかし、私の現実も前述の通りである。他の女性たちが私の妻と同様の反応をするとは限らないが、少なくとも結婚前にカミングアウトしてしまえば、結婚が壊れるとは限らないし、もし結婚していても、奥さんのことを愛してさえいれば、かなりの確率で結婚はくずれないのではないかという予想を私は持っている。

## (2) 同性愛をめぐる「常識」の点検

18歳で新宿2丁目を知り、そこを皮切りに他のゲイたちと出会い、そこからゲイ文化との私の出会いは大きく広がって行った。そのなかで、私はたくさんのゲイたちに出会ううちに、自分がカミングアウトする前に抱いていた同性愛についての「常識」が現実とは随分と違っていることに気づくようになった。もちろん、私が知っているゲイ文化などまだまだ一部分ではあろうが、ゲイの実態を知らせようとするゲイによって書かれた他の啓蒙的作品<sup>7</sup>の内容と見比べても、以下で私が述べていることとそれほど相違があるとも思えない。もっとも、それら啓蒙的作品と私が述べていることとの異同についての厳密な点検を行ったわけではないため、それはあくまでも私の印象である。ともかくも、私が知り得たゲイ文化の限りでいうと、カミングアウトする前の私が持っていたゲイについての「常識」はゲイの実態とはかなりかけ離れているようだ。カミングアウトする前に私が持っていたゲイについての常識とは、世間の「異性愛者」の間に流布している常識ともいえる。もっとも、『同窓会』などのトレンドドラマや、ゲイたちを招いたバラエティ番組などの登場により、また、多くのカミングアウト作

品の公刊により、この15年ほどでゲイの実態も以前よりは知られるようになった。それでも私の印象では、この30年ほどの間に変化はあったものの、ゲイをめぐる以下の点はまだまだ異性愛者たちの常識にはなっていないように思われるうちの代表的なものだ。

### ①「同性愛者と異性愛者は単純に2分できない」

異性に性的欲求を全く感じない同性愛者を「純同性愛者」とし、同性に性的欲求を全く感じない異性愛者を「純異性愛者」とすると、純同性愛者から純異性愛者までの連続線上のどこかにいわゆる同性愛者と異性愛者のすべての人間が位置しているように思われる。前述のように、単に同性愛者と言っても、すべての同性愛者が純同性愛者というわけではなく、異性にも性的欲求を感じる同性愛者もあり、それらの人々が異性に性的欲求を感じる度合いも一様ではない。世間で異性愛者の間に流布している常識では、同性愛者の全員が異性に全く性的欲求を感じない純同性愛者であるとまだまだ思われているようだ。

同性愛者と異性愛者という区別が単純にはできないと言えるもう一つの事情は、同じ人でも時間の経過とともに性的指向の自覚が変化するという点だ。自分は同性には性的欲求を持つような人間だと思っても勝手に結婚し、しばらくしてから同性にも性的欲求を持っている人間だと自覚した男性に私は何人も出会ってきた。そのような人が日本全体でどのくらいいるのかはわからないが、時間とともに性的指向の自覚は変化するのである。

以上のような事情も含め、同性愛者と異性愛者という2分法自体に異議を唱える研究者もいる<sup>8</sup>。

### ②「同性愛者のすべてが性同一性障害者というわけではない」

「生物学的性」と「自分が自覚している性」とが不一致である人を「性同一性障害者」と定義しておこう。これもまだまだはびこっていると思われる誤解であるが、同性愛者と性同一性障害者は同じであると思っている人がまみられる。私の生物学的性は男であり、自分が自覚している性も男である。私は女性になりたいわ



けではなく、自分が女性だと思っているわけでもない。私は男として男を好きになるし、相手にも男として自分を好きになってほしいと思っている。

### ③「大半の男性同性愛者は女装していない」

ここ10数年のうちに女装していない男性同性愛者がマスコミに多数登場するようになり、誤解はかなり減ってきていると思われるものの、すべての男性同性愛者は女装しているとまだまだ思われがちであるようだ。正確な数値は大規模な調査を待たねばならないが、私が知る限りでは、男性同性愛者のうち女装している人は少数派だ。

### ④「同性間の恋愛感情は男女間の恋愛感情と基本的には同じである」

中学時代、誰それが好きだという話が至る所で満開であった。私もその仲間に入り、大いに盛り上がったものだが、女子にたいする男子の思いは誇張されて話されていると私は漠然と思っていた。女子にたいする私の思いよりも、他の男子が話す女子への思いのほうがはるかに強烈だったからだ。しかし、私が高校生になって間もなく、同級生たちが話す恋の気持ちを同性にたいする私の恋の気持ちに置き換えてそれらの話を聞いてみたとき、私は彼らが決して誇張して話してはいないことを悟った。私が同性にいたく恋愛感情は、普通の同性が異性にいたく恋愛感情と全く同じであった。

大学1年のときに、私は男性と女性に同時進行で恋をした。女性は同級生、男性はクラブの先輩であった。そのとき、両者の恋愛感情は基本的に同じであることを私は再認識した。

同性愛者と異性愛者との違いは、性的指向の対象が異なっているだけであるが、カミングアウトする前の私もそうであったように、性的指向の対象が異なっていると、その恋愛感情も異質ではないのか、あるいは、同性愛者は人間的に何か欠陥があるのではないかと考えられがちだ。私が社会病理学の授業で同性愛をとりあげるさいに事前に同性愛者の印象について学生たちに尋ねるのであるが、身近にゲイの知人がいない学生たちの多くは、同性愛者の恋愛感情は異性愛者の恋愛感情と異質ではないかと初めは

考え、また人間的にも同性愛者は自分たち異性愛者とどこか異なっているのではないかと考えがちだ。

### (3) 同性愛についての思い込みの影響力<sup>9</sup>

同性愛を含めた逸脱行動の領域は人々の「思い込み」が特に幅をきかせる領域だ。人々は、自分が思い描く逸脱行動像が他の誰かが思い描く像と同じであり、普遍的だと思いがちだ。その像が現実とずれていることに気づかず、その像が社会的に作られたものだと自覚することを忘れがちになる。同性愛の事例はその典型だろう。

この思い込みがやっかいなのは、それが「思い込み」であると自覚していれば引き起こさなかったであろうような無用な不安や苦勞や苦しみなどを同性愛者たちに引き起こす場合があるからだ。おそらく、他のゲイたちにカミングアウトしていないゲイたちは、現実とは異なる同性愛についての「常識」に振り回され、不要な心勞をしている場合が少なからずあるものと思われる。18歳までの私がそうだった。

現象学的社会学の視点からすれば、人々が思い描く逸脱行動像は人々の数ほどあり、何が「現実」だと断定できるのかが更に問題視されるだろう。しかし、人間が社会生活を営む上では、ある程度の共通認識がないと社会生活は成り立たなくなる。その意味では、私が上記で触れたような「現実」もある程度の共通性はあるものと思われるということだけ指摘して、それ以上「多元的現実」の問題には本稿は踏み込まないことにしよう。

### (4) 同性愛についての思い込みの変容<sup>9</sup>

同性愛をめぐる人々の思い込みは不変ではない。それは社会的に作られている思い込みだからこそ、相互作用のなかで変わりうる可能性を持っている。

カミングアウトしていないゲイたちが持っている同性愛についての思い込みは、他のゲイたちとの出会いのなかで修正されうる。その出会いとは、他のゲイたちとの直接的な対面的出会いだけではなく、『薔薇族』などのゲイ雑誌やゲイである著者による著作との出会いなども含まれる。

「異性愛者」が思い込んでいる同性愛者像は、ゲイたちがカミングアウトして実際の自分たちの姿を知人たちに直接示すことで、また、同性愛について異性愛者が抱いている思い込みと現実とのズレをゲイたちが直接的・間接的に指摘していくことで、ある程度は変えられる可能性を持っている。伏見憲明の一連の著作や、伊藤悟・築瀬竜太（すこたん企画）による諸活動、アカー（動くゲイとレズビアン）による諸活動は日本でのそのような先駆的試みの代表的なものだ。

ゲイを面白おかしくからかう人たちは、自分たちがそのことでゲイをどれだけ傷つけているのかを自覚していない。そのからかいは、そのことを指摘すればかなりやむ可能性はある。それは黙っていれば変えられない。

もっとも、私はゲイたちにカミングアウトを強制するつもりは毛頭ない。カミングアウトしなくても平穩に生活しているゲイはたくさんいるし、波風を起こすことを望んでいないゲイもたくさんいる。少なくとも、同性愛をめぐる思い込みに苦しめられているゲイにとっては、その状態を解決してゆく一つの有望な選択肢としてカミングアウトがありうる。

また、同性愛をめぐる思い込みを変えていく行動をするさいに、異性愛者をむやみに責めたるのは説得力がなさそうだ。抑圧されていると主張するゲイたちとて、自分たちが異性愛者であったならば、ゲイたちに同じ行為をしていたかもしれないからだ。

## 【10】 終わりに

こうして書き終えてみると、頭の整理と気持ちの区切りはある程度ついたものの、その内容は既出のカミングアウト作品と比べてどこがオリジナルなのかと言われると、返す言葉もない。これを書くにあたり、私は国内の関連文献のほとんどには目を通していているものの、海外の文献には翻訳されたもの以外にはほとんど手つかず状態だ。ただ、この程度のもので公表するまでに大学院入学以来 25 年かかったのであり、これを公表するのさえまだまだ勇気が必要

だったことは事実だ。一般の方には目にふれることの少ない紀要であるとはいえ、妻子にかかる迷惑、特に息子にかかるそれを考えると、まだ胸が痛む。これが掲載された紀要が発刊される時には息子は中学 1 年生になっている。その年齢ならば、父親である私の生き方を少しは理解してもらえると信じている。息子にも世間にも私がゲイであることを恥じる気持ちは全くないが、同級生に私のことで息子がなじられる場面を私は想像したくない。息子にはまだカミングアウトしていない私であるが、『クレヨンしんちゃん』をいっしょに見ながら「おかま」が出てくるとまるで笑わず顔をしかめている私を横目で見ながら、自分の父親はどうも他の父親と違っていると少なからず息子は思っているはずだ。彼が同級生などに万が一私のことで不快な思いをさせられることがあったら、彼と真正面から向き合って私の生き方をしっかり話すつもりだ。

私の知る限り、社会学の分野に限定していえば、大学に常勤の職を得ている教員のなかで、ゲイであると研究業績内でも明確にカミングアウトしているのは私と河口和也の二人だけであろう。河口和也は大学院終了後、アルバイトをして生活を支えながらアカー（動くゲイとレズビアン）の中心人物の 1 人として公的に実践活動をしながらゲイに関する研究業績を積み重ね、日本でのゲイ・スタディーズの記念碑ともいべき作品<sup>10</sup>を出版しているばかりか、「府中青年の家裁判」ではアカーの一員として勝訴した。そして彼はついに平成 15 年には広島修道大学に堂々と常勤職を勝ち取った。ゲイに関する研究業績でも彼に大きく水をあげられてしまった私だが、せめて研究面だけでもこれから少しずつその差を縮めていきたい。

## 【註】

1. 伏見憲明『プライベート・ゲイ・ライフ』学陽書房、1991。
2. 掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社、1992。伊藤悟『男ふたり暮らし』太郎次郎社、1993。平野広朗『アンチ・ヘテロセクシズム』現代書館、1994。池田久美子『先生の

- レズビアン宣言』かもがわ出版、1999。他多数あり。
3. 著者が実名で出版したカミングアウトの単行本の限りでのことである。
  4. 東京都立大学昭和48年度総合コース「性」運営委員会編『「性」最終報告書』東京都立大学、1973。  
私の報告部分は、小高良友「The men who love men」、18-22頁。
  5. 小高良友『「ゲイの結婚」について考える』、『東海女子大学紀要』22号、2003、45-49頁。
  6. 小高良友、前掲論文（註5）。
  7. 例えば、モートン・ハント（窪田高明訳）『ゲイ—新しき隣人たち』河出書房新社、1982。伊藤悟『同性愛の基礎知識』あゆみ出版、1996。
  8. 日本人の研究者の中での代表的論者は伊野真一。
  9. ここの部分の骨子は、ケン・プラマーの次の作品によっている。Kenneth Plummer, *SEXUAL STIGMA - An interactionist account*, Routledge & Kegan Paul, 1975.
  10. キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也『ゲイ・スタディーズ』青土社、1997。